

「私の薦める、私の一冊」というコラムの執筆を依頼されたのですが、何か一つを選ぶことが苦手なので、少し違った形で書かせていただきます。

さて、私に原稿の依頼があったのは、担当者が困ったからだと思うのですが、お薦めの本を紹介するという企画が連綿とつづいているというのは、本を読むということに何か意味があつてのことだと思います。

本を読む効能とは何でしょうか？いろいろ考えられますが、一つには教養が身につく、深まるということが一般に認識されていることではないでしょうか。私も窓口で「人と文化」の履修に関して相談を受けることがあり、「将来患者さんと接するのに教養が大事ですよ」なんてことを話しておりましたが、実はいまいちわかっていませんでした。すみません。

ただ、クイズ番組ですらすら答える、飲み会（いまはできませんが）で蘊蓄を披露するためだけのものではないでしょう。

最近読んだ本が結びついて、教養とは引用できるもの・ことを増やすことではないかと、ふと思いつきました。ひきだしという言い方もできるかもしれません。

引用といえば、ヴァルター・ベンヤミンが引用だけで批評を試みたという話を読んだことがあります。批評の対象からどんな言葉（や考え）を引くかにもその人らしさが現れると考えられることから、成立することなのかもしれません。ということは、本を読むことで蓄積された何かは、その人らしさを表わすことになるでしょうし、たくさん蓄積されたほうが、豊かに表わされるでしょう。

また、ひきだしを増やしておくことは何かの理解の手助けになるかもしれません。未知の事象に出会ったとき、既知の枠組みを利用して理解しようとする働きがあります。シェマやスキーマといわれる働きです。また、ひとには「納得」という感情（納得って感情なんですね！）があります。納得できないと次に進めない、進めたとしてももやもやしてスムーズにいかないというものを経験したことはないでしょうか。さきほどのスキーマと同じように、ひとは自分の持っている物語に沿って、ものごとを理解するそうです。理解・納得するためにはたくさんの物語や枠組み（＝教養）をもっていた方が、生きていくために便利かもしれません。

これまでの話とは別に、全く新しい考えに出会うことも本を読むことの効用でしょう。私が最近こころに残ったのは「養生」と「健康」という概念は異なるという話です。健康を第一に考えると悪いとされることも、「生を養う」という意味では良いこともあるとされます。河合隼雄さんは、飲酒を例に挙げていました。

みなさんは大学という教育機関に来ています。学ぶということに多少なりとも興味を持っているのではないのでしょうか？ということは、教養を身につけたり、深めることはご自分の生を養うことになるかもしれません。

また、将来は他人の生を養うお手伝いをする仕事に就く方が多いと思います。その際にもやはりご自分のなかにある教養は役に立つでしょう。

というわけで、この文章を書くにあたって、念頭にあった本を最後に挙げてこの拙文を終えたいと思います。なお、わたしは研究者ではなく「本を読む人」なので、書いてあることは、学問上必ずしも正確ではないことをお断りしておきます。

○内田樹 「子どもはわかってくれない」（文春文庫）2006

○柿木伸之 「ヴァルター・ベンヤミン：闇を歩く批評」（岩波新書）2019

○河合隼雄 河合隼雄セレクション「より道、わき道、散歩道」（創元こころ文庫）2015

○千野帽子 「人はなぜ物語を求めるのか」（ちくまプリマー新書）2017

（著者名の50音順、太字は本学図書館蔵書）

NEWS お知らせ

庶務課

■ 受賞

長年にわたる教育研究のご功績により、本学名誉教授北村桂介氏が瑞宝小綬章を、本学名誉教授（元学長）西野武志氏が瑞宝中綬章をそれぞれ受章されました。

皆様とともに叙勲の榮譽を心からお祝い申し上げます。

令和2年春の叙勲

瑞宝小綬章 名誉教授 北村 桂介 氏

令和2年秋の叙勲

瑞宝中綬章 名誉教授（元学長） 西野 武志 氏